

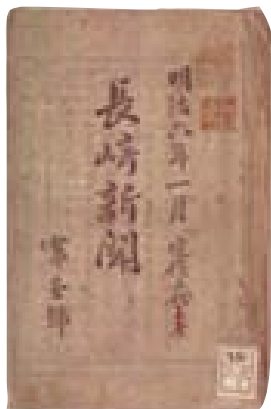
本木昌造

もとき しょうぞう
[近代活版印刷の祖]



本木昌造は、長崎新大工町の乙名町の有力者・北島三弥太の四男として生まれ、十一歳の時に母方の叔父である阿蘭陀小通詞(オランダ人と話すときに通訳をする役人)・本木昌左衛門の養子となった。三十歳で稽古通詞から小通詞に昇進し、訳官として幕府の外交交渉に従事しながら海軍伝習掛通弁官、活字板摺立取扱掛、鮑ノ浦製鉄所御用掛などを歴任。明治元年(一八六八年)、浜町と築町の間にわが国最初の鉄橋を架けたことでも知られている。その頃から普通教育の必要性を感じていた昌造は、「新街義塾」を経営し、読書・習字・算術・洋学を教えるかわら、活字印刷の研究も行い、鉛活字の鋳造に成功。明治三年(一八七〇年)、現在の長崎市消防局下、自治会館付近に新町活版所を創設し、印刷を開始した。また大阪、東京にも印刷所を設け、文部省活字御用掛となり、横浜活版所で横浜新聞(のちの横浜毎日新聞)を創刊。明治六年(一八七三年)には、新塾活版局で長崎新聞を発行するなど、近代活版印刷の基礎を築いた。

多方面で活躍した近代活版印刷の創始者。



長崎新聞第1号(長崎市立博物館所蔵)



長崎は、第二の故郷。

浜尾朱美 =文
Text by Hamao Akemi

随分昔のことになる。22才の私は長崎で社会人としてのスタートを切った。テレビ小説のヒロインとして、だ。日本人の7割以上のハンカチを涙でびしょぬれにした、あの国民的ドラマ「おしん」の裏番組だと言っても誰も覚えていないかもしれないが、ともかくも、その世にも不幸な巡り合わせのドラマ「おゆう」の舞台が長崎だった。

寒いさなか、2月のはじめだったと思う。諏訪神社の境内で、おくんちの撮影をした。長坂の観客役を演じてくださったたくさんの市民のみなさん私の記憶では百人ぐらい、なのだが、そんなにいたはずはない。な。)と一緒に、「もってこーい、もってこーい」を叫んだ。寒さもものともせず、上体をしならせるコッコデショの子ども達の清やかな瞳。龍踊りの龍の頭には、小雪が舞っていた。

その後、私が女優の道を進まなかったのは、「おしん」のせいではなく、ひとえに才能の無さのためだった。が、それでもひたすらに「おゆうさん」の人生を生きた青春のひとつときは、私にかけがえのない宝物をくれた。

第二の故郷を、だ。

あの日、季節はずれの長坂で、隣に立って励ましてくれたお祭り男のマエダさん、地元放送局のユキさん夫妻、マヨリカのご主人、山下のおじいちゃん、島原の宮崎さん。時折、泣きたくなるほど会いたい顔がある。だから、何かと用事をでっちあげては、この町を訪ねる。昨秋、ひとり息子も1才9ヶ月で長崎デビューを果たした。ちゃんぽんをむさぼり食ってありましたデス。



プロフィール はまお あけみ

昭和36年、徳島市生まれ。早稲田大学卒業。昭和58年、テレビ小説「おゆう」の主演を経て、「関口宏のサンデーモーニング」「筑紫哲也ニュース23」「総選挙特別番組」などのキャスター、ラジオ番組のパーソナリティとして活躍。著書に「もう結婚占いはいい」「夢のあと」「私の競馬」などがある。